



現代社会における葬送儀礼

孝本 貢——聞き手・栗原淑江

葬儀見直しの風潮について

栗原 ここ数年、「葬送の自由をすすめる会」によつて自然葬が提唱されたり、友人葬・音楽葬・生前葬等のさまざまな葬儀が行われるなど、従来の伝統的な葬儀のあり方を再検討しようとする風潮が高まっています。孝

本先生は、長年にわたつて先祖祭祀や墓の問題を研究されてこられましたが、そうしたお立場から、昨今のそのような風潮をどうお考えになつてゐるでしょうか。その点について、まずおうかがいしたいと思います。

孝本 確かに近年そうした傾向がみられます。しかしこれはけつして新しい現象ではありません。葬儀の方、葬式仏教への批判は明治の初期や大正期、昭和初期にもあつたもので、最近また強くなつてきていています。私は、この問題は、二つの面から捉えられると思つています。

ひとつは、日本の仏教は「葬式仏教」に成り下がり、信仰、戒律をおろそかにしているとして、「仏教墮落論」という思想的流れがずっと受け継がれてきていくと思ひます。『友人葬を考える』⁽¹⁾でも指摘されているように、

仏教が、政治権力に従属させられ、さらには仏道教団自体が自らの権力をつくり上げ、富と権力を守っていく中で、庶民を収奪する手段として葬式を使うという、いわゆる仏道教団の理想像から乖離しているという問題として出されていったものであります。

もう一方では、「仏教墮落論」がたびたび唱えられていつても、庶民が檀家寺として仏教を受け入れていった、仏教の日本化の現象というものがあります。仏教自身が社会的、時代的なものです。インドで釈迦によってつくられ、中国で変質をして、日本に入ってきた。庶民の中



孝本 貢氏



栗原 淑江氏

この二つの面は分けて考えていったほうがいいと思うんですね。

栗原 後者は、仏教が、葬儀という形で庶民のニーズに応えてきたという側面ですね。

孝本 そうです。神社というのは穢れを扱わないですが、仏教が穢れを扱ってくれる。死体を放置していたのが、近世になつてイエスが自立すると、身内の死者を懇ろに葬りたいという希望が出てくる。だけど葬る時に死体は穢れている。そうすると、穢れを処理するやり方をどうするのか。さらには浄土信仰によって成仏できることを望む。そこで、仏教の僧侶なりお寺さんなりと結びつくというのがあったと思うんですね。

「葬式仏教墮落論」においては、ある意味で、葬式の様式を変えれば解決できる問題だけれども、葬儀そのものの根本からもう一回考え方をすれば、小さい問題ではなくなるでしょう。単なる儀礼様式の改善による解決だけに留まらなくて、成仏をどうとらえるのかという問題も含み込むことになります。

この間、たまたま創価学会の友人葬に参加しましたが、

試みになると思います。

火葬場に行つて遺骨を家に持つて帰つてくる。その時に出てくる発言というのは、「骨が綺麗だった」ということでした。

栗原 ええ、よくいいますね。白い骨だったとか。

孝本 そう、成仏されたというわけですね。そういう成仏されたというのは、本来仏教の釈迦の時代の教えではないのだと思います。そこで成仏といった場合には、たとえば佐々木宏幹先生が『仏と靈の人類学⁽²⁾』において、日本でのホトケは仏教的に意味づけされた「仏」と、一方では民俗的な意味での「死靈」、「祖靈」として捉えられる両義性を具えており、それが仏教と民俗を媒介する彈力性をもち、日本仏教の最重要のタームとなつていてと主張されています。民俗世界においては、死者靈は葬送儀礼、度び重なる年回忌儀礼を受けることによつて、徐々に成仏過程を遂げていくという信仰があると思います。だから、そういう深層レベルまで変えていくつづくのは、日本の基層文化そのものを問い合わせ直していくかなければいけないということです。そういう意味では壮大な

またひとつには、現代の葬祭の問題があると思います。

たとえば、献体をめぐる興味深い話があります。今は、献体が非常に増えて、病院の方で逆に困っているそうです。病院に献体したいと持つていて。いずれは病院と契約しているお寺さんで葬儀を行う。死後に死者の爪とか髪の毛をおさめて葬儀を行う場合もありますが、最終的には骨が出る。そこで、葬儀をやろうとして遺族に連絡しても、遺族が来ない場合が相当あるらしいです。子供が親の葬式をしなければいけないという意識が薄れています。また葬式をできないような状況も出てきます。従来の共同体社会だったら、子供、跡継ぎがちゃんと葬式をやらなくてはいけなかつたのが、崩れていったのだと思います。子供をあてにできないので、生前に戒名をつけおいて、お墓にも刻んでおいて、いつ亡くなつてもいよいよするという例も増えているといわれています。

そのように、葬儀 자체が多様化するし、自分の考え方に基づいてやつてもいいし、やらなくてもいいし、やる場合にもいろいろやり方がてくるのだと思います。

その時に直面して、どのようにしたらよいか解らないと

いうことが大きな問題だと思います。

栗原 最近、伝統的な形態にこだわらないさまざまなか形の葬儀が行われる背景には、イエス制度や共同体の崩壊という社会的な問題があるわけですね。

孝本 共同体内で、葬儀・その後の儀礼の様式が代々伝えられ、こうやるものだと村の長老などから教えられてきていたものが、今はそれを伝承する基盤がない。そうすると、いざ近親の死に直面した場合には、伝承がない。そうするとひとつは、葬祭業者に依存してしまう。それではだめだという場合には、「葬送の自由をすすめる会」のように、自ら摸索していかざるをえない。葬儀が多様化する中で、ある自分のやり方で執り行いたいなり、残された者の価値観でやろうとする場合に、そういう受け皿のひとつとして、このような会が創られていましたと思います。しかし、まだ圧倒的多数は、いわゆる葬儀社を介しての伝統的な葬式に依存していると思います。

戒名について

栗原 創価学会の場合には、今回のいわゆる宗門問題

の過程で、従来の葬儀のあり方の再検討が始まつたわけです。その基調は、故人を思う真心や生前の信仰を強調し、葬式仏教化してしまつた既成仏教を批判するというものです。他に、新宗教団などで葬式仏教を批判した例はありますか。

孝本 たとえば、既成仏教批判を伴なつて宗教運動を展開した事例のひとつとして、昭和の初めに創設された靈友会があります。そこで、「金襴の袈裟衣をかけても、腹わたが腐つていたんでは、仏はご守護にならない」と批判し、自らの先祖に対して、自らが供養するという思想が打ち出される。そして、すべての先祖に対して「生・院・徳」という決まつた法名をつけ、平等に供養する。お坊さんの檀家寺との関係を切るということはしていませんですけれども、金襴の袈裟衣を着ていても心が腐つていたらダメなんだと、強烈な仏教批判をして、特定の修行をし、靈的力をもつた人が法名をつける。それを毎日供養するというやり方で、靈友会系は勢力を伸ばしていった。

栗原 戒名の問題は、島田裕巳氏の『戒名⁽³⁾』をはじめとしてずいぶん話題になつてますが、もう少しその意



対話中の両氏

義等についてお教えください。

孝本 葬儀というのは、ひとつの通過儀礼と捉えてよいと思います。七五三でも、神の子というか、七歳まで神の子として取り扱われ、七五三の儀礼をすることによって人になる過程を経る。そこで変身をするわけですよね。葬祭儀礼も生者から死者への変身という形になるかと思います。それは、オームス・ヘルマン『祖先崇拜のシンボリズム』において、通過儀礼と死者儀礼がみごとに対応している姿を描き出しています。

また、子供の名前についても、幼名から大人名、さらには襲名というように名前 자체を変えていくことが日本社会においては、特に明治以前にはあります。さらに、もし、家に不幸が統ければ、その戸主とか長男の名前を変えることがあります。通過儀礼の節目ごとに名前を変えていくことが、民俗的な発想に流れています。それが近代になって、戸籍法によって生者の名前を変えることが非常に困難になり、生涯同じ名前ということが定着していった。変身して名前を変えることについては、唯一残ったのが戒名であると思います。

という面が目立っているということが、現在の戒名見直しの風潮の背景となっているのではないかと思います。また、葬儀は、残されたものためという側面もありますね。

孝本 そう、残されたものが葬儀の中で、喪主を誰にするのかとかによって、伝統的なイエの繼承者を社会的に認知するそういう役割もあるでしょうし、その儀礼によつて、その家なり、その集団の社会的なステータスを再確認させるという、そういう面もあると思います。單なる死者を葬るための儀礼ではなくて、それにいろんな機能が入り込んでいます。今日ですと、たとえば会社葬では、会社の社会的な位置を再確認させるとかです。それが一般の社員の場合にはそれぞれの家庭でさせる。どのレベルからは会社で執り行うという慣行があると思います。

葬祭儀礼そのものは個人の死者の通過儀礼の側面とともに、そういう、残された人をなぐさめる、いわゆるブ

リッヂファンクションの機能をする側面もあるし、儀礼を通して集団の社会的な認知の再確認をさせる機能もある

戒名は、ある意味で変身して、そこで成仏への道が開かれたことを生者に向かって、明らかにするということ

だと思いますね。戒名は、そういう機能を持つていて、だと思いません。中国においても、俗名で位牌などに書いている。ヨーロッパは洗礼のときに、クリスチヤンネームで変えます。そこで、ある意味で救済の道が開かれています。

栗原 戒名は日本だけですね。

孝本 日本だけですね、中国もないし。韓国においても、中国においても、俗名で位牌などに書いている。ヨーロッパは洗礼のときに、クリスチヤンネームで変えます。そこで、ある意味で救済の道が開かれています。

栗原 かつては生前に、もう法名だったのが、江戸時代に檀家制度の中で死後戒名になつていつた……。

孝本 そういう考え方を、お寺さんのほうでうまく利用していく。もちろん儀礼ですから、僧侶が檀家の確認、さらに収奪のためだけに戒名をつけたというより、戒名を付与することが、顕在的な機能なり潜在的な機能を持つてきます。たとえば葬儀にしても、そういう、死者の通過儀礼としての側面なりがあります。

栗原 そのような戒名の意義と機能が、今日ではあまり意識されず、形骸化してしまい、僧侶の金儲けの手段

るんですね。そうすると、たとえば戒名としても多面的機能が付与されています。その集団の社会的な認知を再確認させるという面で、その人の家なり、ステータスなりを示すことになります。すると、短い戒名だったら駄目だとかになります。戒名を、お坊さんが金儲けのためだけに利用しているものだとしたら、今まで庶民が葬儀という儀礼に対して思い入れをしていたということを潰してしまうことになります。

その側面で、戒名をどうするのかということです。都市社会において寺檀関係は非常に希薄になり、教団の収奪論が突出していつていると思います。しかし、人々に受け入れられて批判をされながら生き延びてきているというのは、やっぱり受け入れる素地があつたからだと思います。

創価学会の「友人葬」

栗原 戒名の問題を含めて、創価学会は今まで葬儀の問題をあまり意識していなかつたかもしれません。葬儀だけでなく、七五三や結婚式などの儀礼も寺院で行うの

が慣例となっていました。それに対し、在家だけの新宗教教団は、最初から僧侶抜きで儀礼を行っていたということですね。

孝本 そういう意味では、創価学会は、ずっと日蓮正宗の僧侶に依存していたことが乗り越えられなくて、最近問題が出てきたと思います。もし分離した場合には、創価学会独自のやり方をどうしていくのか、それが、非常に問題になつてくるんだと思います。

栗原 創価学会は、さきほど話にも出したましたように、現在「友人葬」という形で、僧侶を呼ばない葬儀を行っています。これは、僧侶主導の葬儀を見直し、在家が自らの手で執り行つてゆこうというものです。ある仏教学者は、この試みを、「儀礼は在宅で、僧侶は自分の修行をする釈迦の教えにもかなつたものだと指摘されています。先生は、こうした試みについて、どうお考えですか。

孝本 「葬送の自由をすすめる会」などのような私的な小さい勢力でなく、大きな勢力として日本社会にある学会が問題提起したことは、相当なインパクトがあります。先生は、この試みを、「儀礼は在宅で、僧侶は自分の修行をする釈迦の教えにもかなつたものだと指摘されています。先生は、こうした試みについて、どうお考えですか。

な付き合いがある。それをどうするのか。

栗原 現在は主として、儀典部というセクションに属する会員が導師をつとめています。日頃から故人やその家族と親しい場合が多いので、真心の込もつた葬儀になつたという感想が多くかかります。背広姿にもほとんど違和感はないようです。

孝本 それと、創価学会の友人葬だからといって、創価学会員だけが来るわけではない。葬式には、未信者の方が多いわけです。そういう未信者の人たちにも、何とかまだ違和感があると思うんですね。戒名を見ても俗名ですしね。俗名でいいっていうのが決してはつきりされていないです。ごく最近までは、学会は日蓮正宗の信者として正宗式の戒名に変えていたわけです。それで安定できるような思想はできているか、私はまだできていなといっています。

さきほどいつたように、靈友会の場合には、そこでもう皆平等だと、院号法名をつけて、それによって解決の道を出したと思います。それを今度は創価学会の方では戒名とはどのように位置づけるのか。それはつけない場

ですね。日本の仏教を射程に入れて、救済の側面にどう切り込んでいくかが問われていると思います。

栗原 実際に列席されて、どのような感想を持たれましたでしょうか。

孝本 ひとつは、学会の会員は相当多いですね。ちょうど昭和三十年代から四十年代の初めくらいにどんどん入会した人が多いんだと思います。そうするとその年令がどんどん上がっていくと、これからどんどん葬式が増えていく。この前は県長とか婦人部長とか、そういう人が導師をしてました。会員が高齢化すれば毎日葬式に出歩かなくてはいけなくなる状況が生じてくるでしょう。

導師をつとめる方たちが世俗の生活を放つておいて、毎日出なくてはいけなくなつて、生活はどうするのかということになります。それが、専門職になつたら、僧職と同じ位置になります。今までの創価学会と意味が違つてきて、それも大変だなと思いました。

毎日それこそ、葬儀で出かけなければいけないとなると、その人にとって仕事がないといつても、いろいろ

合にも説明が求められていると思います。

結局、信仰をすつとしていたら成仏するんだと説いても、それは確信がないわけです。特に、自力の立場であれば、どこまでいっても信仰は無限大で、ここまでいけば信仰が完成されたという到達点はないのです。そうすると、その人は死ぬまでお題目を唱えていたが、どこかで変な考え方をしながらお題目をしていたとか、あの人はお題目は熱心だけど酒飲みだとか。そうした場合においても、戒名をつけさせることによつて、生き残った人が、あの人は成仏してくれて、今度は、^{荒魂}としてこの世に未練を残している存在からだんだん成仏してもらつて、供養していくって、今度は和魂となつて守ってくれる靈になつてくれるということだと思います。

栗原 それをきちっと目に見える形で保証する……。孝本 そうだと思います。戒名は、変身を具象化し、葬儀などに参列した人に対して、あの人はこういう人だったのかを戒名によつて、たとえば徳のある人と知識のある人であるとかをシンボル化していきます。それを皆に納得させていくんですが、俗名にはそれがないんで

が慣例となつていきました。それに対し、在家だけの新宗教教団は、最初から僧侶抜きで儀礼を行つてゐたということですね。

孝本 そういう意味では、創価学会は、ずっと日蓮正宗の僧侶に依存してゐたことが乗り越えられなくて、最近問題が出てきたと思います。もし分離した場合には、創価学会独自のやり方をどうしていくのか、それが、非常に問題になつてくるんだと思います。

栗原 創価学会は、さきほど話にも出ましたように、現在「友人葬」という形で、僧侶を呼ばない葬儀を行つています。これは、僧侶主導の葬儀を見直し、在家が自らの手で執り行つてゆこうというものです。ある仏教学者は、この試みを、「儀礼は在家で、僧侶は自分の修行をする」などのやうな私的な小さい勢力でなく、大きな勢力として日本社会にある学会が問題提起したことは、相当なインパクトがあります。先生は、こうした試みについて、どうお考えでしょうか。

孝本 「葬送の自由をすすめる会」などのやうな小さな感想が多くきかれています。背広姿にもほとんど違和感はないようです。

栗原 現在は主として、儀典部というセクションに属する会員が導師をつとめています。日頃から故人やその家族と親しい場合が多いので、真心の込もつた葬儀になつたという感想が多くきかれています。背広姿にもほとんど違和感はないようです。

孝本 それと、創価学会の友人葬だからといつても、創価学会員だけが来るわけではない。葬式には、未信者の方が多いわけです。そういう未信者の人たちにも、何かまだ違和感があると思うんですね。戒名を見ても俗名ですしね。俗名でいっていうのが決してはつきりされていないです。ごく最近までは、学会は日蓮正宗の信者として正宗式の戒名に変えていたわけです。それで安定できるよう思想はできているか、私はまだできていないと思います。

さきほどいつたように、靈友会の場合には、そこでもう皆平等だと、院号法名をつけて、それによつて解決の道を出したと思います。それを今度は創価学会の方では戒名とはどのように位置づけるのか。それはつけない場

すね。日本の仏教を射程に入れて、救済の側面にどう切り込んでいくかが問われていると思います。

栗原 実際に列席されて、どのような感想を持たれましたでしょうか。

孝本 ひとつは、学会の会員は相当多いですね。ちょうど昭和三十年代から四十年代の初めくらいにどんどんどんどん上がつていて、これからどんどん葬式が増えていく。この前は県長とか婦人部長とか、そういう人が導師をしてましたが、会員が高齢化すれば毎日葬式に出歩かなくてはいけなくなる状況が生じてくるでしょう。

導師をつとめる方たちが世俗の生活を放つておいて、毎日出なくてはいけなくなつて、生活はどうするのかということになります。それが、専門職になつたら、僧職と同じ位置になります。今までの創価学会と意味が違つてきて、それも大変だなと思いました。

毎日それこそ、葬儀で出かけなければいけないとなると、その人にとっては仕事がないといつても、いろいろ

合にも説明が求められていると思います。

結局、信仰をずっとして成仏するんだと説いても、それは確信がないわけです。特に、自力の立場であれば、どこまでいつでも信仰は無限大で、ここまでいけば信仰が完成されたという到達点はないものです。そうすると、その人は死ぬまでお題目を唱えていたが、どこかで変な考え方をしながらお題目をしていたとか、あの人はお題目は熱心だけど酒飲みだとか。そうした場合においても、戒名をつけさせることによつて、生き残つた人が、あの人は成仏してくれて、今度は、荒魂あらみたまとしてこの世に未練を残している存在からだんだん成仏してもらつて、供養していくつて、今度は和魂わごとなつて守ってくれる靈になつてくれるということだと思います。

栗原 それをきちんと目に見える形で保証する……。孝本 そうだと思います。戒名は、変身を具象化し、葬儀などに参列した人に対して、あの人はこういう人だったのかを戒名によつて、たとえば徳のある人とか知識のある人であるとかをシンボル化していきます。それを皆に納得させていくんですが、俗名にはそれがないんで

すよね。そういう意味では、どういう人であったのかを示す材料がないと思います。

仏教式の戒名は一字だけで——「徳」とか「知」だけ——皆が納得するでしょう。それ以上は、人柄、生き方、人格を問わないとする。それでいすれば、たとえば、いくら酒飲みであつて夫婦で喧嘩をしていたとしても、あの人はいいところがあつたのだと。それで戒名はこの字をつけたのだと、それで皆守つてくれるんだとなりますが、俗名では世俗生活の姿が消えない。全部良い側面も悪い側面も永遠に残つていきます。そういう意味では、俗名で通すとなると、それを説明する理由がいると思ひます。

俗名でもいいとは思いますが、生前どのようないいでも、いざれは神、仏になつて守つてくれるんだと、そう社会のシンボルとして戒名はあります。だから、そのところも考へる必要が出てくる。

栗原 現在のところ、戒名なしで不都合だったという意見はほとんどないようです。むしろ俗名の方が親しみがある、真心が込もるという声が多くあがっています。

「変身」についても、戒名よりも「生前の信心」が大切だという考えが浸透しているせいか、あまりこだわりはないようです。ただ友人葬もいわば過渡期ですので、ご指摘の社会的な意味も含めて、今後さらに明確にしていかなくてはいけない点もあると思います。

墓について

孝本 創価学会の場合には、今まで沢山造つてこれらたお墓の問題をどう位置づけるのか。創価学会も「一 家」墓を造つてこられたですね。

栗原 そうですね。イエス墓ですね。

孝本 そうすると、家を単位にしたものから、信仰を単位にしたものに変えていくのか。それも可能だと思います。日本の場合、けつしてイエス墓だけでお墓は成り立つたのではなく、多様なものがあります。たとえば、新潟とか北陸地方の真宗地帯に多く見られるように、村とか寺を単位にした納骨堂を造立した場合もあります。

そういう意味では、イエス墓というよりも、そこの村、寺を単位にした合葬墓です。それから、宗教教団がひと

つの合葬墓を造る場合もあります。そこに一緒にお骨を納骨し、祭祀をする。それは国柱会の場合にみられます。信仰を共通するものがお骨を納めればいいんだと。それは近年ではなくて、まだイエスが生きている時代にそういう恰好になつています。

お墓のものにしても葬式のやり方も信仰共同体でやるんだ、その後の祭祀も信仰共同体でやるんだといつて、それはけつして日本人に受け入れられないものではないと思います。個別の祭祀については家庭でやるとしても、遺骨は共同で祭祀できるし、そのほうが、ある意味で望まれる場合もあると思います。

栗原 日本人の場合、遺骨に関する執着はかなり強いといわれますね。

孝本 たしかにそれは強い。骨が靈魂のシンボルとしてみられています。たとえば日本人だけ戦地に行つて遺骨の收拾をやりました。だけど、その骨は永遠にその家が囲うのかといえば、そうではないです。結局、骨を靈魂の代として持つてくる。そして、今度は自分たちの

お墓に祭祀をして完結する。骨 자체は、そこで土にかれります。位牌もそうですね。何年かたてばお墓に埋める場合もある。それで自然にかえつていくことが望ましいと観念されています。

驚いたのは、大正五年ぐらいに、新潟県の糸魚川市のひとつ村落で、出稼ぎの人たちが多い、あまり裕福なところではないんですが、それまではイエス墓が結構あつたらしいが、それを全部掘り起こして、大きな村墓を作ります。その村墓に深い穴を掘つて、遺骨はその墓の裏の入口からどんどん入れます。

昭和五七年頃、お墓が崩れそうになつて改築されます。その時、糸魚川から転出していつている人もいるわけですが、一人だけ自分の家族のお骨を持っていきたいという人がいた。ところが何もないわけです。そこで墓の底の土を骨のかわりに持つて帰らせたという。

そういう意味では、近代になつてイエス墓として完全に固定して、この墓はこの家の墓であつて、この家の子孫がこの墓を祭祀しなければいけないということが強くなつたと思うんです。それは明治民法の祭祀財産の承継が

跡取りの特権事項となり、「イエ」の枠組みを国家が規定していくことにも求められます。

栗原 大正五年にそういう運動があつたというのは、興味深いことですね。その場合、宗教的な裏づけはどうなんでしょうか。

孝本 それは特に関係ありません。だから今は、毎年お盆の時に、神社が神主一人と、関係する檀家寺十二ヶ寺の僧侶が一同に集まって——真宗が多かつたですが——合同で供養する。

同じ信仰を持つ、たとえば創価学会でもいいですね、創価学会の信仰を持つ人が、ひとつの祭祀や墓のシステムをつくり、皆で守っていくことになれば、それはひとつの中道だと思います。創価学会員が既存の檀家寺とうまくいかなくて、結局どんどん自らの家の墓を造り、イエ墓になつていつていますが、それをもう一度再編する道もあると思います。

栗原 国柱会のように、信仰を同じくするものが合祀をする、という発想ですね。

孝本 それ以前は、本願寺とか高野山とかは喉ばとけ

などの分骨を行う慣行があります。しかし、国柱会はそれが違つて全骨を納骨することもあります。それによつて無縫仏も防げるし、そういう意味では安心感を与えていると思います。

そういう側面を、日本人の伝統的な文化は持つてゐるんだと考へています。それが近代になつて政治権力なり、國家権力なりによってどんどんイエが強調され、天皇制を支える基底としてイエが打ちたてられ、イエは絶対的なものだと観念されてきたと思います。自分のイエといふのは所詮いろいろなイエと結びついた中でしか成り立たないんだと。そうすると祭祀の仕方についても、皆で守つてきたという面が崩されてきたともいえると思います。

栗原 昨今、墓地不足がいわれ、一方では墓地造成が環境破壊を引き起こすとの苦情も出ています。平面墓地は限界などの声も聞こえる中で、合祀や、墓地の存在を否定するような自然葬（散骨・散灰）の試みも行われ始めています。そうした中で、ご指摘のよう、同じ信仰に基づく合葬墓というのは、環境問題対策もありますけ

れども、そういうこと以上に興味深いものだと思います。

先祖祭祀について

栗原 次に、先祖祭祀といふか、年忌法要といふか、一周忌、三回忌、七回忌、……五十回忌などについてはいかがでしょうか。

孝本 それは大正大学の藤井正雄先生などが、専門に研究されています。ある意味で、荒魂から、おだやかな和魂になるんだという世界觀があつて、そこに、年回忌などの仏教的儀礼を執り行うようになり、中国仏教的なものから日本的なになつてきましたといえます。そしてそれが、お坊さんの生活の糧にもなつてくる。

死体が穢れたものであつて、死者はこの世にいろいろ未練を残したり、恨みを残したりする存在であつて、それが、段々おだやかなホトケとなり、さらには先祖靈として守護神となり、子孫を守つてくれるという、その一連の儀礼であるといえます。お坊さんの方でそれを発見して、つくつて、庶民を縛つていつたといつてもあります。民俗信仰が基底にあるといつてよいでしょう。

栗原 それが現代のように、イエ制度も崩壊し、皆都心に出てきたりすると、今まで当然のごとく親類が集まつて行つていたけれども、それがだんだん重荷になつてくる。そうした祭祀自体が難しくなつてくると、本当にやらなくてはいけないんだろうか、というような考えも出できます。その時だけ親戚が集まれてよい、という世俗的なこともありますけれども。

孝本 儀禮といふのは、宗教的な意義だけではなくて、他の機能が入つていて、年回忌の時にお互いに自分たちの身内であるとか、親戚であるとかそういうのを確認する場となつていています。それが、たとえばおじいさんの十三回忌をしますから、というように何ら抵抗なく、手紙、招待状も出せると思います。

それが全然なくつて、今みたいな移動社会になつて、ますます皆はらばらになつてきます。それで、たとえ集合住宅があつてもその中は皆ばらばらでね、そうすると、何らかの契機に親族関係を再確認しようとする役割を果たし、その節目としては年回忌法要がひとつの役割を果たしていると思います。

アメリカとかで、どんどん自分からネットワークをつくりていって、人間関係ができる。また、子供は子供で別なネットワークをつくればいいんだという。奥さんと夫であっても別のネットワークでいいんだという。そういうふうには日本社会はなかなか進まない。

そういう意味では、自前の思想で自分は何なのかといふところにまでいってない。自分は何なのかといった場合に、親だとか先祖だとかがまだ強い。そこで年回忌法要で自分はどういう存在であるかを、親族の中で、自分がどういう伝統であるとか、親戚の人はこういう職業だとかの結びつきの中で自分を考えてしまう。

また、アメリカ式の自前の思想でいいのかといふと、アメリカ自身も一方では崩れている。近代以降、アメリカなりヨーロッパなりがモデルとなって、脱亜入欧といつてアジアは蔑視し、ヨーロッパをモデルにして生きてきた、頑張ってきた。ところが、どうもそのモデル自体も崩れています。そうすると自分たちで結局モデルをつくらなくてはいけない。究極的なモデルの意味づけを果たしうるものとして、宗教が一番担うものだと思

いますし、それにより安定した世界観をつくってきた面もあると思います。

それを受け入れてきたわけです。しかし、それが現実の葬式仏教というように、非常に問題が噴出しているのは事実だと思います。成仏というひとつの思想を受け入れて、葬式仏教の側面を変えればいいのか、それとも成仏の側面まで問題にするのかということです。私は成仏の側面まで変えていくのかといった展望を開いていく、積極的方法を模索していくのだと思います。そこからひとつモデルを提示していくようにしたほうがいいと思いますね。

葬送文化の今後

栗原『友人葬を考える』でも、葬儀の本義を忘れた現状に対する批判というのが根底にあります。そもそも葬儀というのは人間にとつて何だったのか、本義以外のいろいろな付着物がついてきて弊害となっているのであれば、それらを全部取り除いて、もう一度本来のあり方

に戻そではないかということです。

幸本 そうなんですね。たとえば釈迦の教えとか、日蓮の教えとかがあり、その一方では日本人の持つている世界観がある。釈迦の教え、日蓮の教えそのものの理念なり教義なりイデオロギーを尺度にして、そこに全部引っ張っていく方法がひとつはあると思います。

しかし、日本の場合、そこに民衆がいて自らの民俗信仰世界と、理念としての教義上の教えとの間を常に往復しながら、片方にあまりに行き過ぎた場合、葬式仏教などと批判が出て、少しこれをソフトする。また、元に戻るという繰り返しをしてきた。どちらかを全部抹消してしまうこともできない。もしどちらかを抹消してしまったら、教団は成り立たない。この間をどうやっていくのか。日蓮の教えの原理を一方の尺度とした場合、もう一つの尺度として民衆がそれを受容した尺度があると思います。その両方を射程に入れて、今後のあり様は考えられなければならないと思います。

栗原 現在、弊害がみられるとしても、仏教が民衆の心を表現してきたという面、それによって仏教が民衆の

中で生き延びてきたという面は確かにありますね。

幸本 その場合、救済という側面があります。日本の場合の成仏はある意味で救済ですね。それが生前に救済されているというシステムをつくる方法があります。しかし、成仏したのかどうかをどのように確認するシステムをつくるのか。それはできないんだと思います。たとえば学会の教学試験で百点とつたら成仏しましたというわけにはいかないのではないかでしょうか。これは個人の救済という側面です。

またひとつは共同性です。だんだん社会が私化していく中で共同性をどのように構築していくのか。従来はイエスを単位にした親族共同体、地域社会があつたが、それも崩れていく。死をむかえた場合、死者を取り巻く家族や親族を苦しみから救っていく役割が、共同性を持つているところに覆いかぶさつてくる。それをどうしていくのか。その場合に、友人葬が担うというのもひとつの解決法だと思います。救済と共同性をどう保証していくのかが、大きな課題です。

これから宗教が生きていこうとすれば、戒名やお墓を

どんどん売り、それを財源にして、教団を維持していくことは可能だと思いますね。たとえば、創価学会式の戒名をつくり、それを売れば教団は維持できますね。だけど、それでは解決にはならないでしょう。日本人の持っている世界観なりを射程に入れて、新しい葬儀のあり方を考えていくという方向でない限りは、一時的危機改革論にすぎない。

栗原 そうですね。現在創価学会がやろうとしている

ことも、技術的な問題だけではなくて、葬儀の本来の意義にたちかえって、現代にふさわしい新たな葬送文化を創造してゆきたいということです。日本の基層文化に由来するものでも外来のものでも、よいものであれば残してもよいし、それを世界にアピールしてゆくことも考えられると思います。

孝本 日本の外来思想の受け入れ方は、儒教にしても、仏教にても積極的に受け入れてきて、自分なりに解釈して日本の体系を創り上げてきた。秋迦の考え方方がこうだから秋迦の考え方に戻れとか、日蓮の考え方に戻れといつてもそれはいかない。

百年ぐらいかかるでしょう。平安末から浄土の考え方に入ってきて、浄土思想が安定してきたのが江戸の中期ぐらいですから。それを変えるとなると、いろいろしなければいけないでしょう。日本の社会でどういうモデルとなるのが、日本以外で普遍化できるのかどうかですね。

『友人葬を考える』のあとがきに、「世界で日本が孤立し、日本たたきが起こるのは、われわれ日本人や日本社会のあり方に問題の一因があるのだ」とことを、葬儀をめぐる問題を検討していくなかで、改めて痛感した次第です。このような日本を再生させ、世界に通用する、または世界が喜んで受け入れてくれる新しい文化を発展させる大いなる任務を、日本の宗教は担つていかなくてはならないでしょう。なぜなら、宗教は、日常生活の中で習慣などを、見つめ直し、再検討していく『反省の働き』を、その中心的で重要な機能としてもつていて、あります（二二七—二二八頁）とあります。こうしたことが要請される時代だと思います。

栗原 新たな葬送文化の創造のためには、責任をもつ

栗原 そうですね。現代を生きるという立場で考える必要がありますね。

孝本 たとえば、本来のお葬式というのは、お坊さんは形だけで、超世俗の人として戒名をつけ、穢れを払う力をもつていて、それで地域社会では安定していた。だけど、戒名をつけない、お坊さんが出ないとなると、では、穢れを誰が払うのかが問題になりますね。踏み込んで儀礼の形を整える必要が出てくる。

世界の中でモデルがなくなってきた。伝統的なイエス・キリスト教の共同体モデルも崩れてきたのだから、自分たちでつくらしかったと思っています。今さらアメリカ的な生活スタイルがいいとは言えないです。犯罪率も日本よりもはるかに高いですし、それをモデルにできない。今まで日本社会がつくれてきたマイナスの面は戒名にしても葬式仏教化にありますが、救済なり共同性というものを持つていたのだから、それを選り分ける中で、新しいモデルを模索していく以外に仕様がないのではないかと思うか。非常にしんどい仕事であるとは思いますが、

かりに創価学会が友人葬を定着させていくとしても、

て思索と実践を積み重ねてゆくことが必要だということでしょうか。本日は、長時間にわたり貴重なお話をいただき、大変にありがとうございました。

引用文献

- (1) 東洋哲学研究所編／中野毅・小林正博・栗原淑江・木暮信一・藤田尚則『友人葬を考える』第三文明社、一九九三年。
- (2) 佐々木宏幹『仏と靈の人類学』春秋社、一九九三年。
- (3) 島田裕巳『戒名 なぜ死後に名前を変えるのか』法藏館、一九九一年。
- (4) オームス・ヘルマン『祖先崇拜のシンボリズム』弘文堂、一九八七年。

(「いつもと みつぎ・明治大学教授)
(くりはら としえ・東洋哲学研究所研究員)